

札幌市北区のはり・きょう治療院経営、山田英雄さん(48)は視覚障害があるものの、絵手紙を楽しんでる。制作は工夫を重ね、絵や字が盛り上がる立体プリントも活用。作品に触れて出来栄を確認できるようになり、やりがいが増した。「支えがあれば実現できることはたくさんある。障害のある人も可能性を追いかけてほしい」との思いを強くしている。

(相川康暁)

11月上旬、北区の交流カフェ「フェリあん」で開かれた絵手紙教室。はがきに刺した虫ピンを起点に、山田さんが湯飲みを描き始めた。1筆目の場所をわかりやすくする工夫で、講師の斉藤美雪さん(54)と考えた。テーマは自宅にある日用品が中心。描く前に時間をかけて触ることで、絵をイメージしやすくするためだ。斉藤さんは極力手を出さずに見守り、1年がたつ。

山田さんは1993年、網膜色素変性症と診断された。現在の視力はほぼなく、車のヘッドライトや店の照明など光をわずかに感じる程度。「風間は霧の中にいる感じ」という。

北区で2017年に治療院を開業した。地域の住民に治療院を知ってもらおうと、近所で開かれる健康教室などに参加する中、治療院から100円ほど離れたところにある絵手紙教室を知った。

昨年11月に「できるかどうかかわからず、見学のつもりで」参加。初めての作品は「言われなければわからないピーマン」。ただ「どうすれば書けるかを

視覚障害の山田さん 描いて、触れて、支えられて

重ねた工夫 絵手紙づくり充実

「自分の可能性追いかけて」

私の目線で教えてくれてうれしかった」という。斉藤さんが繰り返す「下手でいい、下手がいい」という絵手紙の心得も、また通いたいと思える力になった。

さらに今年5月、SIN KA(シンカ)社(東京)が販売する立体プリンターと出会った。色の濃い箇所は高く、淡い箇所は低く、点字のように盛り上がり、印刷される。同社の好意で、作品の写真を送ると、立体プリントして返送してもら

えるようになった。当初は彩色もしていたが、今は墨のみ。作品を触ると、濃淡でより出来栄がわかるようになったという。

10月からは山田さんの着けたカメラとマイクを通して、



視覚障害があるものの、絵手紙を楽しむ山田英雄さん(右)。講師の斉藤美雪さんが見守る。

じ、支援者が画像や文章を読み上げてくれる。リモートアシスト社(大阪)の遠隔支援サービスも取り入れた。自分や他の人の絵手紙の絵や文章の内容を読んでもらえる。山田さんは「絵手紙を描けて、触って、内容も理解しやすくなった。周囲のおかげで感謝する。日本絵手紙協会(東京)は「全国に教室はあるが、視覚障害者が受講するのは珍しい」という。山田さんは「まだまだなことをできるかどうか迷う障害者は多いかもしれない。ただ、人とのつながりや工夫で乗り越えられることもある。視覚障害がある人にも絵手紙の楽しさが広がってほしい」と話している。